

農環研に期待する連携効果

千葉県農林総合研究センター センター長 金子 文宜
(独) 農業環境技術研究所 評価委員



現 在、研究の在り方は、好奇心駆動型から使命誘導型へと変容し、農環研と都道府県の研究機関が連携することによって、早期の研究成果が求められています。この連携においては、研究成果のみならず、研究員の資質向上や新たな研究の方向が見出される等の効果もあります。

千葉県では農業振興や県民の豊かな生活を技術開発の面から支援するために「試験研究推進方針」を策定して、生産力の強化、環境への調和、資源の維持増大と多面的機能の保全、オリジナル品種の育成、多様な担い手を支援し経営を強化する5つの方針を策定し、研究管理、プロジェクト研究、産・学・官の連携、知的財産の管理や研究者の資質向上等を掲げて研究を推進しています。この中で独立行政法人との研究交流や専門分野における情報交換を積極的に進めることとしており、農環研とは土着天敵の利用や土壌消毒法の開発等の共同研究を実施し、農家に役立つ成果を挙げてきました。この共同研究では、当センターの資質向上という連携効果がありました。県の研究者には、科学的手法を備えていることに加えて、研究の社会的な波及性を考える力、さらに基礎的な研究を行う専門家と農家を仲立ちする説明力、技術を普及させる時に生じる障壁いわゆる「魔の川」の克服力が求められています。また、行政や普及に異動するローテーションがあることから、短時間で研究能力を高めることや専門家の人脈を構築することが必要となっています。これらは、一朝一夕に培われるものではありませんが、農環研との共同研究や共催した講演会では、新しい研究手法や分かりやすい発表方法が得ら

れたとともに、研究者の仲間づくりができ、大きな財産になりました。

さらに、連携効果を生み出す農環研の指導力にも期待しています。国内で唯一土壌インベントリを有する研究機関として、土壌調査法の研修等は継続をお願いします。また、放射性物質に関する知見に基づく提言や指導は、農産物の安全性を確保するために今後も重要な活動です。超低カドミウム水稻は、食の安全を目指す農家が自信を持って農業に取り組める品種の育成になるものと期待しています。最近では、科学と社会の関係において、科学は必要であるが科学だけでは解決しえない問題も提起されています。農薬及び肥料による環境汚染や、開発した技術のリスクの評価・管理にかかわる研究では、科学者の社会的責任や研究者倫理についても連携して考えていく必要性を感じています。すなわち、1918年のノーベル賞につながったハーバー・ボッシュ法が、窒素肥料を製造する夢の技術である反面、爆薬も製造できる負の側面があったように、現代において開発された技術が有する功罪の見極めは、研究者の正義によってしっかりと検討されなければなりません。

結びに、農環研には、土、水、大気、化学物質にかかわる基礎研究とそれを統合して農業と環境の法則を明らかにする使命を果たし、わが国の農業研究をリードすること、さらには都道府県の研究機関との連携を深め、win-winの効果をあげることに期待をしています。